

〈研究ノート〉

## 〈続〉 田村（佐藤）俊子の中国時代の年譜 (1942年5月～1945年4月)

朱 彩雲

はじめに

本稿は拙稿「田村（佐藤）俊子の中国時代の年譜（1938年12月～1942年5月）—新資料をもとに」<sup>1</sup>という中国時代前期の俊子の年譜整理に引き続き、中国時代後期の俊子の年譜を整理するものである。中国時代後期は、俊子が上海で中国語婦人雑誌『女聲』を創刊しはじめた1942年5月から、上海で亡くなった1945年4月までの時期を範囲とする。この時期は、俊子の最晩年の約3年間で、主に上海で『女聲』を主宰していた頃である。

この時期の俊子の年譜は以下の5つの文献に記載がある。

- ①工藤美代子／スーザン・フィリップス『晚香坂の愛——田村俊子と鈴木悦』ドメス出版、1982年
  - ②長谷川啓／黒澤亜里子（編）瀬戸内寂聴・小田切秀雄・草野心平（監修）『田村俊子作品集 第三巻』オリジン出版センター、1988年
  - ③瀬戸内寂聴「田村俊子」『瀬戸内寂聴全集』新潮社、2001年
  - ④小平麻衣子・内藤千珠子『21世紀日本文学ガイドブック⑦ 田村俊子』ひつじ書房、2014年
  - ⑤涂曉華『上海淪陷時期《女声》雑誌研究』中国伝媒大学出版社、2014年。
- これらの年譜では、1943年分については、①②④は空白で、③⑤は簡単な記述が

---

1 『一橋研究』第45巻3号、2020年10月

あるのみである。1944年分については、①②③④は空白で、⑤は一文の記述だけである。このように中国時代後期の俊子の活動については不明なところが多い。

筆者は主に中国の新聞・雑誌『申報』、『中華日報』、『雑誌』、上海での日本語新聞『大陸新報』、日本文学報国会の機関紙『文学報国』から発掘した俊子に関する報道や記述、及び俊子に関連する他の文献に基づき、整理を行った(本稿第二節参照)。その過程で、この時期の俊子が雑誌『女聲』を主宰しただけでなく、第三回大東亜文学者大会に参加したり、中日文化協会で活動をしていたことに気づいた。これら『女聲』主宰以外の俊子の活動の詳細は別稿で論じる。

### 【凡例】

\* [ ]内は稿者による注記である。

\* 付録の翻刻にあたって、適宜に句点を付けたり、字体の調整を行った。

## 一、田村俊子の年譜（中国時代後期：1942年5月～1945年4月）

### 1942年5月から（58歳）

- ① 俊生 [佐藤俊子] 「四月影壇：一個新時代的展開」 [中国語] 『女聲』第1巻第1期 1942年5月15日発表
- ② 5月末、戦地慰問の新潮社班として上海に来た佐多稲子に再会した。[涂曉華(2014: 93～94)及び佐多稲子研究会(1979: 511)を参照]
- ③ 惟為 [本名不明] とともに中華聯合電影公司 [映画会社] の総経理 [会社の最高責任者]・張善琨を訪ね、30分間余り対談した。1942年5月15日～6月15日の間だと推定。[惟為「張善琨先生訪問記」『女聲』第1巻第2期 1942年6月15日を参照]
- ④ 俊生 [佐藤俊子] 「五月影壇」 [中国語] 『女聲』第1巻第2期 1942年6月15日発表
- ⑤ 俊生 [佐藤俊子] 「六月影壇」 [中国語] 『女聲』第1巻第3期 1942年7月15日発表
- ⑥ 俊生 [佐藤俊子] 「影壇雜記」 [中国語] 『女聲』第1巻第4期 1942年8月15日発表
- ⑦ 夏、方媚 [凌大嶸] とともに女性画家の呉青霞にインタビューした。[方媚「呉青霞女士之画房」『女聲』第1巻第4期 1942年8月15日を参照]
- ⑧ 『女聲』社の同人 (関露、凌大嶸、趙蘊華) とともに、梅蘭芳にインタビューした。1942年9月15日の前だと推定。[芳君「訪問梅蘭芳先生」『女聲』第1巻第5

期 1942年9月15日を参照]

#### 1943年（59歳）

⑨ 3月20日、『女聲』の編集者である凌大嶸と共に、上海の匯中飯店で中華電影会社が東宝劇団の来華のためにおこなった歓迎会に出席した。[方媚「中華電影公司給東寶劇團來滬洗塵」『女聲』第1巻第12期 1943年4月15日を参照]

⑩ 真夏、『女聲』の編集者である凌大嶸と共に、小宮義孝[上海自然科学研究所の研究員、医学博士]の案内で上海自然科学研究所を見学した。[方媚「一所中日合辦的科學研究所」『女聲』第2巻第7期 1943年11月15日を参照]

⑪ 9月16日、上海での清水登之作品展[従軍画家としての清水登之の陸軍美術展]を見学した。[「大陸画廊展 初日の入場者」『大陸新報』1943年9月17日を参照]

⑫ 熹[『太平洋週報』の編集者である盧瀟]とともに、10月から上海・南京へ旅行に来た阿部知二、豊島与志雄にインタビューした。1943年10月～11月だと推定。[熹「阿部知二和豊島与志雄」『女聲』第2巻第8期 1943年12月15日及び関口安義(1987:399)を参照]

⑬ 11月22日、南京で宣伝会議に列席し、また、会議後の汪精衛が主催する茶会で、当日北京から南京に来た久米正雄に会った。この宣伝会議は、日華文学の交流についての内容らしく、南京宣伝部の楊鴻烈をはじめ、龔持平、陳寥士や北京、漢口、上海からの文化人が出席している。例えば、周化人、周越然、潘序祖、魯風、柳雨生、陶晶孫、関露なども参加した。[「満華文学界の動向 使命を果たして 久米事務局長の帰朝談（続）」『文学報国』1944年1月10日を参照]

⑭ 大晦日、川鍋東策と一緒に上海のカセイ・マンションに滞在していた阿部知二を訪ねた。そこには先客の三橋敏子[陶晶孫の秘書]がいた。のちに4人とともに太平印刷会社の忘年会に参加した。[瀬戸内晴美(2001:280～284)を参照]

#### 1944年（60歳）

⑮ 元旦の朝、1943年12月から日本文学報国会文学駐在員として上海に来た、幼なじみの久保田万太郎とキャセイ・ホテルの食堂で朝食。[和田博文(1999:244)及び瀬戸内晴美(2001:289)を参照]

⑯ 1月26日、川鍋東策とともに、久保田万太郎を上海の大場鎮の飛行場まで見送った。[瀬戸内晴美(2001:291)を参照]

⑰ 「日華の演劇に就て」[久保田万太郎との対談]『大陸新報』1944年2月1日～4日発表

⑱ 2月7日、中日文化協会上海分会が午後に行った女性作家座談会に参加せずに、夜に小林秀雄を招待するための宴会に参加した。宴会のほかの出席者は中日文化協会の主席である周化人や、陶晶孫、丘石木、柳雨生、魯風、潘予且、草野心平、関露等である。[邵迎建(2018:395～396、398)、陳雁(2014:301)、「中日文協舉行女作家座談會 晩間設宴招待小林秀雄氏」『申報』1944年2月8日第3版を参照]

⑲ 5月20日に、上海文学研究会が主催して、上海青年館講堂で開かれた『文芸講演と詩の朗読の夕べ』に小泉譲と同席した。[佐藤竜一(1999:128)を参照]

⑳ 7月、張資平らとともに中日文化協会上海分会の文学委員会の委員に招聘されることになった。[「中日文協會 推進業務」『申報』1944年7月30日第3版を参照]

㉑ 8月9日午後5時半から、中日文化協会上海分会の文学専門委員として、第三回大東亜文学者大会の準備、および中日文学作品に関する話題の打ち合わせに出席した。ほかの出席者は、関露、陶晶孫、周越然、潘予且、丘石木、陶亢德、路易士、池田克己、石上玄一郎、武田泰淳等である。[「中日文協 文協文学専門委員を招集」『大陸新報』1944年8月13日を参照]

㉒ 10月、華中鉄道股份有限公司[華中鉄道株式会社]の弘報室で偶然に、窪川鶴次郎に再会し、のちに、女声社オフィスへ寄ってから上海の中日文化協会へ行った。[長谷川啓[編](1990:245)を参照]

㉓ 10月26日、佐多稲子宛の書簡をしたためる。[長谷川啓[編](1990:245)を参照]

㉔ 11月12日～14日、南京で開催される第三回大東亜文学者大会に参加し、15日に大会の出席者として蘇州観光に参加後、翌16日に上海に戻り、17日に中日文化協会と雑誌聯合会が主催した文学者代表座談会に出席した。なお、この大会には、日本文学報国会の上海在住小説部会員として来賓の扱いで招かれていた。

[以下の5つの文献を参照。]

「三屆大東亜文學者大會 昨在京隆重揭幕」『中華日報』1944年11月13日第3版、

「特輯 文學者印象」『雜誌』第14卷第3期1944年12月10日、

「文學者代表抵滬 中日文協舉行座談會」『中華日報』1944年11月17日第1版、

「中日文協與雜誌聯合會昨聯合主催 文學者代表座談會」『新中国報』1944年11月18日第2版と第3版

「第三回大東亜文学者大会報告」『文学報国』1945年1月1日]

#### 1945年(61歳)

㉕ 1月、中日文化協会上海分会が文化工作のために結成した、「現地学術文藝方面の日華権威者を集めた」学術委員会の委員に決定された。ほかに選ばれた委員は、周

越然、小竹文夫、張資平、小宮義孝、東二郎、東中秀雄、広瀬庫太郎、陸鴻君という8人であった。「中日文化協会 文化工作に本腰 學術委員会を結成」『大陸新報』1945年1月21日を参照]

②⑥ 2月3日に佐多稲子宛の書簡をしたためる。[長谷川啓[編](1990:248)を参照]

②⑦ 4月13日夜、陶晶孫の家で晚餐、帰り道で発病し、16日になくなった。葬儀委員会は福間徹副領事、内山完造、保科清春、會田綱雄、関露等からなる。17日の夜、北京路一五七四階[俊子の住所]で記念式典、18日午後2時から、上海本願寺で告別式を行った。[瀬戸内晴美(2001:294)、「日旅滬女作家 佐藤俊子病逝」『申報』1945年4月17日第2版、「佐藤俊子さんの告別式」『大陸新報』1945年4月18日を参照]

## 二、年譜の参考文献（年代順）

### 中国語文献

#### (1) 雑誌・新聞

『女聲』:

・俊生[佐藤俊子]「四月影壇：一個新時代的展開」『女聲』第1巻第1期1942年5月15日

・俊生[佐藤俊子]「五月影壇」『女聲』第1巻第2期1942年6月15日

・惟為[本名不明]「張善琨先生訪問記」『女聲』第1巻第2期1942年6月15日

・俊生[佐藤俊子]「六月影壇」『女聲』第1巻第3期1942年7月15日

・俊生[佐藤俊子]「影壇雜記」『女聲』第1巻第4期1942年8月15日

・方媚[凌大嶸]「吳青霞女士之画房」『女聲』第1巻第4期1942年8月15日

・芳君[関露]「訪問梅蘭芳先生」『女聲』第1巻第5期1942年9月15日

・方媚[凌大嶸]「中華電影公司給東寶劇團來滬洗塵」『女聲』第1巻第12期1943年4月15日

・方媚[凌大嶸]「一所中日合辦的科學研究所」『女聲』第2巻第7期1943年11月15日

・熹[盧瀟]「阿部知二和豊島与志雄」『女聲』第2巻第8期1943年12月15日

『申報』:

・「中日文協舉行女作家座談會 晚間設宴招待小林秀雄氏」『申報』1944年2月8日第3版

・「中日文協會 推進業務」『申報』1944年7月30日第3版

- ・「日旅滬女作家 佐藤俊子病逝」『申報』1945年4月17日第2版
- 『中華日報』:
- ・「三屆大東亞文學者大會 昨在京隆重揭幕」『中華日報』1944年11月13日第3版
- ・「文學者代表抵滬 中日文協舉行座談會」『中華日報』1944年11月17日第1版
- 『新中国報』:
- ・「中日文協滬會昨舉行 上海女作家座談會 晚間設宴招待小林秀雄氏」『新中国報』1944年2月8日第3版
- ・「中日文協與雜誌聯合會昨聯合主催 文學者代表座談會」『新中国報』1944年11月18日第2版と第3版
- ・「日女作家 佐藤逝世」『新中国報』1945年4月17日第2版
- 『雜誌』:
- ・『雜誌』第14卷第3期1944年12月10日「特輯 文學者印象」のうち、汪正禾「瑣屑上人物」86頁、荻崖「日本作家剪影」101頁、「日本文學者略歴・著作」102頁
- (2) 著書・論文
- ・呂元明「田村俊子の中国歷程—明治時代的人道社会主義者の悲愴之路」『被遺忘的在華日本反戰文学』吉林教育出版社、1993年、185～189頁
- ・涂曉華『上海淪陷時期《女声》雜誌研究』中国伝媒大学出版社、2014年、93～99、171頁
- ・陳雁『性別与戦争 上海1932-1945』北京：社会科学文献出版社、2014年、301頁
- ・邵迎建「被遺忘的細一張愛玲、李香蘭合影時空考」『張愛玲的伝奇文学与流言人生增訂本』北京：生活・讀書・新知三聯書店、2018年、395～396、398頁

## 日本語文献

### (1) 新聞

- 『大陸新報』:
- ・「大陸画廊展 初日の入場者」『大陸新報』1943年9月17日
- ・「中日文協 文協文学専門委員を招集」『大陸新報』1944年8月13日
- ・「現地日本作家を招待 文学者大会」『大陸新報』1944年10月19日
- ・「中日文化協会 文化工作に本腰 學術委員会を結成」『大陸新報』1945年1月21日
- ・「訃報 佐藤俊子さん 写真あり」『大陸新報』1945年4月17日
- ・「佐藤俊子さんの告別式」『大陸新報』1945年4月18日
- 『文学報国』:

- ・「満華文学界の動向 使命を果たして 久米事務局長の帰朝談（続）」『文学報国』1944年1月10日（『復刻版 文学報国』不二出版、1990年、49頁）
- ・「第三回大東亜文学者大会報告」『文学報国』1945年1月1日（『復刻版 文学報国』不二出版、1990年、107頁）
- (2) 著書・論文ほか
- ・奥野信太郎「忘れがたい人」『町恋いの記』三月書房、1967年
- その中で、「その次に会ったのは昭和十八年の秋、南京においてであった。玄武湖に小船をうかべて、俊子さんと土屋文明さんとぼくの三人で、湖上の秋色を心ゆくばかり楽しんだ」（105頁）と記されている。注目すべきことは、ここで三人が南京の玄武湖で遊んだ時期については、「昭和十八年の秋」ではなく、第三回大東亜文学者大会への参加に来た1944年の秋だと考えられる。
- ・佐多稲子研究会「年譜」『佐多稲子全集 第十八巻 / エッセイ（戦後Ⅱ）』講談社、1979年、511頁
- ・関口安義「豊島与志雄年譜」『評伝 豊島与志雄』未来社、1987年、399頁
- ・田村俊子〔著〕長谷川啓〔編〕「佐多稲子宛書簡」[1944年10月26日と1945年2月3日の2通]『作家の自伝87 田村俊子』日本図書センター、1990年、245～249頁
- ・佐藤竜一「小泉譲の証言」『日中友好のいしずえ—草野心平・陶晶孫と日中戦争下の文化交流』日本地域社会研究所、1999年、128頁
- ・和田博文『言語都市・上海 1840-1945』藤原書店、1999年、244頁
- ・瀬戸内晴美「田村俊子」『瀬戸内寂聴全集』新潮社、2001年、280～284頁、289頁、291頁、294頁
- ・大橋毅彦ほか『上海 1944-1945 武田泰淳『上海の螢』注釈』双文社出版、2008年、36頁
- ・大橋毅彦ほか『新聞で見る戦時上海の文化総覧：「大陸新報」文芸文化記事細目』ゆまに書房、2012年、289頁、412頁、431頁、475～476頁
- ・「日華の演劇に就いて（上）」[久保田万太郎と佐藤俊子の対談]黒澤亜里子 / 長谷川啓〔監修〕『田村俊子全集第9巻』ゆまに書房、2017年
- ・清水登之 | 『靖国の絵巻』 | 國學院大學 (kokugakuin.ac.jp) 2021年3月16日閲覧

付録：

1、【翻刻・翻訳】俊子に関する『申報』報道

(1) 「中日文協會 推進業務」『申報』1944年7月30日第3版

翻刻：中日文協會 推進業務

中日文化協會上海分會自陶晶孫氏就任局長以來，工作推進，不遺餘力，近為聯絡中日文學家情感起見，特組織文學委員會，延聘張資平 佐藤俊子等為委員，介紹名著，選譯兩國優良文學作品，此於兩國文化交流，實有大之貢獻。

日訳：中日文協会 業務を推進

中日文化協会上海分会は、陶晶孫氏が局長に就任して以来、全力を傾けて仕事を進めている。近頃、中日文学家の気持ちを伝えるために、わざわざ文学委員会を組織し、張資平や佐藤俊子などを委員として招聘し続けて、名作を紹介し、両国の優れた文学作品を選んで翻訳する。これによって、両国の文化交流に大きな貢献になる。

(2) 「日旅滬女作家 佐藤俊子病逝」『申報』1945年4月17日第2版

翻刻：日旅滬女作家 佐藤俊子病逝

日本著名女作家佐藤俊子，旅滬多載，對於溝通中日國民感情，夙稱努力，不幸於昨日上午十時，因腦充血重症病逝於鈴木[木?]醫院。按佐藤女士原名田村俊子，為日本大正時期著名小說家，與谷崎潤一郎氏齊名，並曾住美國及北平多年，在滬主辦女聲月刊，銷行極盛。現由其生前友好福間徹副領事，內山完造，保科清春，會田綱雄，關露女士等，組成治喪委員會，並定今晚在北京路一五七四樓，舉行追思禮。

日訳：在上海の日本女性作家 佐藤俊子が病気で逝去

日本の著名な女性作家である佐藤俊子は、数年間上海に滞在し、中日国民の感情の疎通に努力してきたが、不幸なことに昨日の午前10時、脳溢血により鈴木[木?]病院で逝去した。佐藤女士の元の名前は田村俊子で、日本の大正時期の著名な小説家で、谷崎潤一郎氏と名声を等しくした。また、かつてアメリカおよび北平に数年間滞在し、上海で女聲の月刊を主宰し、その売れ行きは極めてよかった。いまは、生前の友人である福間徹副領事、内山完造、保科清春<sup>2</sup>、会田綱雄、関露女士等からなる葬儀委員会が組織され、今晚北京路一五七四階で、記念式典を行うことになる。

2 保科清春は、共同印刷会社写真課長の職にあったが、上海の太平出版印刷会社の社長である名取洋之助の誘いで、上海へ赴き、太平出版印刷会社の支配人になった。俊子の雑誌『女聲』の印刷は太平出版印刷会社が担当していたのである。(三神真彦『わがままいっばい名取洋之助』筑摩書房、1988年、231、234頁を参照)